

「主の熱心がこれをする」

Ⅱ列王記 19:8-37

【1】ハロウィンについて

10月に入るとハロウィンの飾り付けが目立ってくる。ハロウィンはキリスト教のまつりと解説しているものもあるが、それは誤りである。むしろ、真の神を礼拝するクリスチャンは避けなければならない悪魔的行事である。ハロウィンの仮装は人間と悪魔を同化させようとするものであり、私たちが真に恐れなければならない方がどなたであるかを惑わす。悪魔と神を同列に置き、神から人々を引き離すのである。私たちはこの世のものを怖がる必要はない。永遠の愛を持って愛される神を恐れ、愛し、平安に導かれよう。

【2】民の見本として

ヒゼキヤの生涯は信仰者にとっての見本となる（手本ではない）。それは、神と人との間で揺れ動く問題の中にある信仰者の姿である。このような問題の中にあって最終的に神に立つ者の幸いを知るのである。クリスチャンは主権者なる神を認めるとき、その目が開かれていく経験をする。人間中心から神の主権の中を生かされるという世界観が聖霊によって与えられるからである。神はこのヒゼキヤを主権をもって選び、導き、神の民に対してご自身の御業を見せてくださるのである。

神はヒゼキヤの祈りを聞かれた。主のことばは必ず成る。それは、必ずしもすぐに人の目に見える変化ではない。しかし、ヒゼキヤが祈ったその祈りを神は確かに聞いてくださり、ご自身の御腕をのばされた。ヒゼキヤはいよいよ深まる危機を感じていたが、実はアッシリアにとってもこのときは危機的な状況が迫っていたのである。

【3】アッシリアの脅しに対して

アッシリアの王は再び遣いを送り、ことばの脅しをエスカレートさせた。前回は民に対して「ヒゼキヤにごまかされるな」（18:29）という内容であったが、今回は「おまえの神にだまされてはいけない」（19:10）という直接的に信仰を揺るがすことばが使われている。このことばを受けたヒゼキヤは迷わずこの手紙を主の前に持ち出した（19:14）。全身全霊をささげて主にぶつかっていく信仰者の姿に見える。八方塞がりで見えないヒゼキヤであったが、このとき彼は主権者の御手を凝視する信仰へと導かれていた。

【4】霊的戦いと勝利

信仰者は霊的戦いを戦う者でもある。クリスチャンになった瞬間から、私たちはサタンの執拗な攻撃の的となる。悪魔は私たちの信仰を奪い去ることはできない。が、私たちを迷いとスランプに陥らせることは可能である。センナケリブのことばはそのような信仰を弱らせようとするささやきであった。

これに対してヒゼキヤは主の前に事を持ち出すことを学んでいた（16）。危機における勝利は、何によってもたらされたのだろうか。それは、敵の前で沈黙し、神の前に謙虚な心をもって出て、神に問題を申し上げ、神に対して祈りをささげ、信仰をもってゆだねることによってであった。この祈りと神への信頼を主は求めておられたのである。主は最終的にユダに介入して下さった。それは、ご自身のイスラエルに与えられた約束に対する忠実さ、主の熱心によったのである。主の契約こそ私たちの信頼の柱である。